

ライブラリーサービス研究会

大学図書館における専門職問題の（私的）論点整理（ラフスケッチ）

文教大学越谷図書館

鈴木 正紀

1. 報告の概要

今回の報告では、これまでさまざまな角度から論じられてきた大学図書館員の職員問題・専門職論について、それをいくつかのカテゴリーに整理をし、今後の展望について私見を述べる。報告に当たっては、それぞれの論点に関する参考文献を挙げ、必要に応じて簡単な紹介を行っている。

2. いくつかの論点

- (1) 職務内容（何ができることが専門職なのか）
- (2) 専門職「発展段階論」
- (3) 個人の専門性／組織の専門性
- (4) 育成・研修
- (5) 待遇問題
- (6) 専門職制度

3. 各論

- (1) 職務内容（何ができることが専門職なのか）

・「専門性の3要件」（日本図書館協会（JLA）図書館員の問題調査研究委員会：1974年）
→利用者を知る，資料を知る，利用者と資料を結びつける

（文献）

- ✓ 図書館員の問題調査研究委員会「図書館員の専門性とは何か（最終報告）」『図書館雑誌』68(3), pp.104-111(1974.3)
- ✓ 日本図書館協会図書館員の問題調査研究委員会『図書館員の専門性とは何か：委員会の記録』東京，日本図書館協会，1976，199p.
- # 公共図書館では「図書館員の専門性」を表す表現としてよく用いられてきた。
- # 抽象的表現にとどまる。その後具体化がされず，放置されたまま。
- # JLA 職員問題委員会では，1990年代に，この3要件では不十分だとして，「第4の専門性」として，「図書館経営能力」を加えることが検討された。しかし，検討でとどまり，その後委員会も発展的解消されたため，議論はそこで止まってしまった。今後の展開はおそらくないと思われる。

・大学図書館の業務から専門的職務を腑分けする

(文献)

- ✓ 日本図書館協会 専門性の確立と強化を目指す研修事業検討ワーキンググループ(第2次)「大学図書館の業務分析」(2000/3/21)
<http://www.jla.or.jp/kenshu/kenshuwg/siryo2.pdf> (2009-04-20)
- # 大学図書館の仕事を5つの領域(経営管理, コレクション・マネジメント, 資料組織, 利用サービス, システムの活用と運用管理)にわけ, それぞれの領域における業務を, 「専門性の高い業務」「大学図書館の基本的業務」「一般的業務」の3つのクラスに分類した。これにより, 大学図書館の専門的職員が担うべき職務は何か, を明確にするとともに, 高度な専門性を身につけた職員の育成・認定ということを視野に入れたJLAの研修事業として具体化することを目指した。しかし, 大学図書館員の研修事業はJLAにおいてはいまだ実現していない。
- # なお, このWGが行った業務分析は, 1968年に行われた全国国立大学図書館館長会議による『大学図書館の業務分析』がベースとなっている。
- ✓ 大庭一郎『『大学図書館の業務分析』:日本の大学図書館における専門的職務と非専門的職務分離の試み』『図書館学会年報』44(1), pp.32-48(1998)
- # 1968年の『大学図書館の業務分析』の史的評価を行っている。
- ✓ 国立大学図書館協会人材委員会「大学図書館が求める人材像について:大学図書館員のコンピテンシー(検討資料)」(2007.3)

・業務委託問題との接続

(文献)

- ✓ 鈴木正紀「アウトソーシング」『変わりゆく大学図書館』東京, 勁草書房, pp.177-190(2005)
- # 大学図書館の職務を専門的業務/非専門的業務に区分した際, 専門的業務は図書館の専任職員が担うべきとし, その非専門的業務, あるいは定型的業務を誰が担うか, という問題に対して, それは業務委託という形で行うケースが, 現在の時代背景もあって生まれてきた, それに関する問題点等を論じている。

・主題専門家, サブジェクト・スペシャリスト, という図書館員像

(文献)

- ✓ 加藤修子「大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育」『Library and Information Science』30, pp.93-113(1992)
- # 主題専門家について言及された文献のレビュー(主として1980年代)

- ・BPK(Body of Professional Knowledge)モデル：専門職が身につけるべき専門的知識・技能の体系化

(文献)

- ✓ 永田治樹「大学図書館における情報専門職の知識・技術の体系：LIPER 大学図書館調査から」『図書館雑誌』99(11), pp.774-776(2005)
- # 情報専門職が身につけるべき知識・技術を構造化し、「中核となる知識・技術領域」(Core Schema), 「実現環境の知識・技術領域」(Application Environment), 「汎用的・移転可能な知識・技術領域」(Generic and Transferable Skills)の3つの領域に整理をした。この3領域が同心円の構造を描く。BPKモデルは英国のCILIPが提出したモデル。日本図書館情報学会の共同研究LIPER (情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究 2003-2005年度) 大学図書館班が行った国内の大学図書館に対するアンケート調査の分析過程で適用することとなった。
- ✓ 三浦逸雄 [他]「大学図書館員の知識ベースと図書館学教育：「図書館学教育の実態と改善に関する調査-大学図書館編」の報告」(1)(2) 『図書館学会年報』37(3), 37(4), 49-63, 103-116(1991)
- # 大学図書館員に必要な知識・スキルを明らかにすべく、著者たちが全国の大学図書館管理職に対して調査を行い、それを分析した研究。とかく抽象的・心情的になりがちな職員問題、専門職論のなかで、図書館員に対するアンケート調査結果から必要とされる具体的知識・スキルを抽出したことは高く評価できる。先述の LIPER 大学図書館班の全国調査は、このときの調査項目を踏まえたものとなっている (10 余年たったところでの変化を見ようとした)。

(2) 専門職「発展段階論」

- ・「準専門職」というとらえ方

(文献)

- ✓ 大城善盛「アメリカにおけるライブラリアンシップの発達：大学図書館司書の専門職化研究 (1)」『図書館界』28(5), pp.183-190(1977)
- ✓ 大城善盛「アメリカに大学図書館司書の待遇の変遷：大学図書館司書の専門職化研究 (2)」『図書館界』29(6), pp.233-244(1978)
- ✓ 大城善盛『「専門職」に関する一考察：大学図書館司書の専門職化研究 (3)』『図書館界』31(3), pp.236-242(1979)
- ✓ 大城善盛『「準専門職」とアメリカの大学図書館司書：大学図書館司書の専門職化研究 (4)』『図書館界』31(5), pp.331-339(1980)
- # 職業として確立した専門職 (医師, 法律家) との対比で図書館専門職を「発展途上の

専門職」(＝準専門職)と位置づけ、専門職としての発展には何が必要かを検討している。

- ✓ 鈴木正紀「大学図書館員論の枠組みと大学職員論」『21世紀の図書館と図書館員』(論集・図書館情報学研究の歩み 第20集)東京, 勉誠出版, pp.79-97(2001)
- # それに対し, 図書館職固有の専門性があることを W.バーゾール『電子図書館の神話』によりながら論じ, 合わせて, 日本の組織風土(大学を含む)において大学図書館の職員問題を論じるための枠組みについて論じている。

(3) 個人の専門性／組織の専門性

- ・従来, 図書館員の専門性が論じられる際には, もっぱら個々の図書館員に求められる知識・技能に焦点が当てられていた。しかし, 図書館は(ワンパーソンライブラリーを除けば)複数の人間が共同して仕事を遂行するという, 組織をベースにして動くものである。とすれば, 専門性を持った人間が, どのように組み合わせたり, 協力をして力を発揮していくか, といった観点で専門性が論じられる必要がある。図書館は司書だけいれば動くというものではないはずであり, 図書館にどれくらいの数司書がいればいいのか, といったかつてよく論議された問題にも, 一定の解が導かれるかもしれない。

(4) 育成・研修

(文献)

- ✓ 長坂みどり「国立大学の法人化と図書館職員」『情報の科学と技術』55(12), 534-540(2005)
- # 法人化により, 国立大学図書館の予算, 組織, 人事等がどのように変化したかをレビューしている。国立大学図書館協会人材委員会において整備されてきた研修の体系を示している。

(5) 待遇問題

・ファカルティ・ステイタス

- ✓ 岩猿敏生「アメリカの大学における academic status の問題」『大学図書館研究』1 pp.3-12(1972)
- ✓ 牧野泰子「アメリカにおける大学図書館員の専門職化運動の行方」『大学図書館研究』25, 32-38(1984)

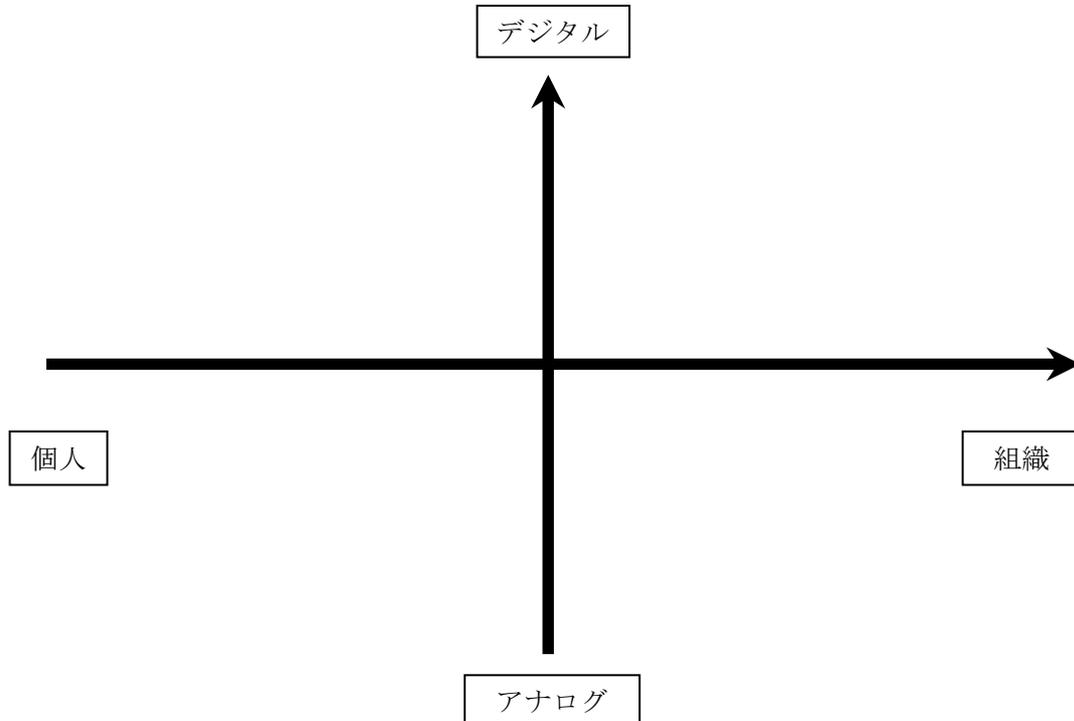
(6) 専門職制度

(未)

4. 専門性をめぐる今後の議論の方向性について（私見）

・ふたつの軸：

- ☆ アナログからデジタルへ（ICTの影響の拡大） digital
- ☆ 個人から組織へ（よりシステマティックな経営へ） more systematic



- ・環境（ハードウェア，ソフトウェア）のデジタル化が一層進む中で，サービスを開発し，提供していく力
- ・業務の機械化が進んでないなかで個々人の裁量幅が大きく認められていた環境から，業務管理システムを介した **systematic** な環境で業務を進める環境に変化してきた，そのなかで適切に仕事を進められる力
- ・ただし，この二つの軸だけでは，すべてを論じられないことは当然ではある。